

## 上郡町の偉人

## 大鳥圭介

第十七回

## 「真摯の人」

著者 中川由香

「中外工業新報」は日本初の工業雑誌で、明治十一年六月に初号刊行された。隔週。主催者は大鳥圭介である。局長は荒井郁之助。編集長・印刷は金子精一。荒井は旧幕時代からの圭介の親友、金子はその父が教育を圭介に委ねた洋学者だった。発行社は

「櫻水舎」と奥付にある。この社名は、当時の圭介の住所「櫻川町」に由来した。この時の圭介は、工部省工學頭兼製作頭兼内務省勸業寮四等出仕。誰も一度で覚えられない肩書きだ。圭介は工部大学校他、造船所・機械・セメント工場等、二省に跨り軽工業以外の工業を総括した。多忙を極める圭介が、私的活動で工業育成のために発刊した雑誌である。

緒言は、当時の工業先導者たる圭介の信念が凝縮されている。幾度も他書で引用された名文である。「自由民権の説の多くは、欧米の時運を俄に東方に伝える一急癖で、実益を得るに却って道は遠い」と自由民権論に懐疑的姿勢を示した。一方で「衣食住が人生に最重要、それを安定させる為に、公正な工業を興し恒産の道を開くことが要。皆が生業を持ち労働できれば、どんな苦難にも挫けることは無い」と、生業の本質と重要性を、現実的に圭介は示した。

記事は、およそ産業に結びつきそうな事象を手当たり次第に取り上げている。酪農、牛肉、缶詰、ビール、藍、綿、ゴム、砂糖、紅茶、レモネード、材

木、塩、氷、ガラス、鉄、石灰、漂白粉、蠟、石綿、インク、石膏、明礬、鉛筆、靴、寒暖計、肥料、墨汁、膠、石鹼、石炭、瓦斯、水車、電信機、削岩機、ポンプ、避雷針、顕微鏡、アルコール、硫酸、ヨウ素、硝酸、硫黄、水銀、防腐法、めっき、合金、レング、衛生、道路、鉄道、等、枚挙に暇が無い。

圭介の記名記事は約半数の号にある。「氷の説」「油の説」「明礬の製法」「造化力の説」「噴出井戸の掘方」「北海道開拓論」「日本美術」等だ。一方「三実論」「勸業の弁」等、無記名だが圭介寄稿と思しき記事も多い。荒井も「タイプライターの説」「回光器」等寄稿、「米国測量記事」も無記名だが荒井の筆だろう。また、志田林三郎、高嶺讓吉、藤岡市助ら工部大学校学生による翻訳や論文も多数掲載されている。

さらに、地方からの質問や要望に応じて書かれた記事も多い。信州の堀内新助が「蜜柑糖製法」という記事を投稿するなど、地方の独自の技術も吸い上げる編集姿勢が伺える。中央と地方の技術知識の交換と波及が目的にあったのだろう。また、坪井信良や栗田万次郎、伊藤圭介、田中芳男など、工学の分野に留まらず幅広い知識人が寄稿している。

巻末には、圭介担当の工部省工作局の広告が掲載された。例えば機械製作を行なう赤羽工作分局は、見学の他、図面がない実業家に所属の機械技術者が

相談に乗り、製図して注文を受ける。民間支援、官から民への技術移転の役割を示している。

編集後記には工作局の製品、工部大学校生の実習内容、読者質問へ回答する実験や製作結果など、関連活動について詳しい。また、北海道移住の洲本土族による厳しい自然下の商品作物農業・通商の成功談など、民衆に力を与える好例も紹介されている。

工業新報は、年間総集編として製本されたものを除き、復刻されていない。研究論文でも参考資料に掲げている文献は少なく、知名度は低い。多くの記事が無記名であることが一因だろう。誰が書いたのかという名誉欲とは無縁な実直的なあり方が感じられるが、今後の歴史研究活用を期待したい。

六年間継続した工業新報だが、財政は苦勞した。工部大学校学生が雑貨店を開き、翻訳知識で化粧品、白粉、歯磨き粉等売り赤字を補おうとした。が、学生の科学考究製品は、気味悪がられあまり売れなかった。男子学生達が雑誌存続の為に化粧品片手に奔走する様はいじらしい。結果から見ても、工業新報が一般に理解されるには二十年早かった。圭介の事跡には、活字や石油などの傾向がある。必要とされる時期より一世代先に導入を始めた為、その成果が一旦宙に浮き、先導者としての名声に繋がらない。それを是とし、一番難しい道なき道を後続者に指し示した。それが大鳥圭介という人物の足跡である。



工業新報第一号